

I. ヨハネ黙示録を学び始めるにあたって。

1. 著者：パトモスのヨハネ

伝統的には使徒ヨハネとされてきたが、現代の聖書学では、福音書や書簡の著者とは文体や神学的強調点が異なることから、「長老ヨハネ、もしくは、パトモスのヨハネ」と呼ばれる人物による執筆というのが通説。彼は初期キリスト教共同体において一定の権威を持つ指導者であり、自分自身を「預言者」(神の言葉を託され、語る人)として位置づけている。

2. 執筆年代と時代背景：ローマ帝国による圧制

- ・年代：紀元90年代中頃。ローマ皇帝ドミティアヌスの治世(81年から96年)末期。
- ・背景：当時、皇帝崇拜が強制され、これに従わないキリスト教徒は社会的・経済的な孤立、あるいは物理的な迫害にさらされていた。ヨハネ自身も、信仰ゆえにパトモス島へ流刑に処されていた。
- ・思想的文脈：当時のユダヤ・キリスト教界に流布していた「黙示思想(アポカリプス)」に基づいている。これは「現在は悪が支配しているが、神の介入によって間もなく逆転し、救いの日が来る」という二元論的な世界観である。

3. 場所：パトモス島とアジアの七つの教会

- 執筆地：エーゲ海に浮かぶ孤島パトモス。
- 宛先：ローマ属州アジア(現在のトルキエ西部)に位置する「七つの教会」(エフェソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキア)。これらは当時の主要なキリスト教の拠点象徴している。



4. 内容と構造: 象徴で描かれる「終末」

黙示録は、当時の読者には理解できるが、部外者(ローマ当局)には解読できない「象徴の言語」で書かれている。

- ・序文と七つの教会への手紙(1-3章): 各教会の現状(妥協、苦難、怠慢)を叱咤激励し、勝利を促す。
- ・天上での礼拝と七つの封印(4-7章): ほふられた「小羊(イエス・キリスト)」が歴史の封印を解く。
- ・七つのラッパと鉢(8-16章): 神の裁きが段階的に厳しさを増して地上に下る。ここには自然災害や戦争が象徴的に描かれているが、目的は「悔い改め」への促しである。
- ・大淫婦バビロンの没落(17-19章): ローマ帝国を象徴する「バビロン」の滅亡と、天の軍勢による勝利。
- ・最後の審判と新天新地(20-22章): 悪の根源であるサタンが滅ぼされ、死も涙もない「新しいエルサレム」が天から降ってくる。

*これから黙示録を読んでいくに際して心に留めてほしいのは、黙示録は、単なる「世界の終わり」を予言する恐怖の書ではない。その本質は、「不条理な現実にも直面しても、神が歴史を支配しており、最後には愛と正義が勝利する」という究極の希望のメッセージであるということです。ゆえに、「666」や「ハルマゲドン」といった刺激的な言葉に惑わされることなく、この書が当時の苦難の中にいた人々をどれほど励ましたか、その「信仰の抵抗の精神」と「主イエス・キリストへの信頼」を読み取るが何よりも重要である、という点。

1章1-3節

ヨハネの黙示録の冒頭の3つの節は、この黙示録全体の「序文」であり、読者がどのような姿勢でこの言葉に向き合うべきかを示す極めて重要な箇所である。

1節 a. 「イエス・キリストの黙示」

「イエス・キリストの黙示」最初に記されているこの言葉は、黙示録全体のタイトルであると同時に、イエス・キリストについての物語であり、これからの言葉がキリストご自身が与えられる啓示であることを示している。

「黙示」と訳されているもとの言葉は「アポカリュプシス、*αποκάλυψις*」で、ギリシア語で「覆いを取る」(カーテンを開ける)という意味。これは単なる未来の予言ではなく、私たちの目に見える「不条理な現実(迫害や苦難)」の裏側にある、「神による真実の支配」を明らかにするという意味。

1 節b-2 節。「この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した。」

ここでは、この黙示がどのように人間に届けられるのか、その明確な伝達ルートが示されている。

「父なる神」(すべての啓示の源泉)→「イエス・キリスト」(神から啓示を受け、歴史を動かす主体)→「天使」(キリストの代理してメッセージを運ぶ)→「僕ヨハネ」(見たことを記録し、証しする目撃者)→「神の僕たち(教会)」(最終的な受け取り手)

重要なことは、ヨハネが、「神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてのことを」記録している、という点である。

3 節 a. 「この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。」

この節には、黙示録に登場する「七つの祝福(マカリオス、μακάριος)」の最初の一つが記されている。

「朗読する人」(単数): 当時、聖書(写本)は貴重で、礼拝において一人が代表して読み上げた。

「聞く人たち」(複数): 会衆としてその言葉を耳にする人々。

「守る人たち」: 聞いた言葉を心に留め、それに基づいて生きる人々。

この構成から分かるのは、黙示録は個人の知的な好奇心を満たすためのものではなく、「礼拝において共に聞き、実践し、励まし合うため」に与えられたということ。

3 節b. 「時が迫っているからである。」

「時が迫っている(ホ・カイロス・エンギュス、ὁ καιρός ἐγγύς)」という言葉は、恐怖を煽るものではない。「カイロス」は、物理的な時間(クロノス)ではなく、神が介入される「決定的な機会」を指すことばで、「いつ終わるか」という日付の予測ではなく、「今、この瞬間が、神の統治の下にある決定的な時である」という自覚を促している。つまり、激しい迫害の中、信仰を守り抜こうとする「あなたの今の決断、今の歩みには、永遠の価値がある」という、機 r スト者に対する最高度の緊張感と励ましの言葉である。

今日の 1 節から 3 節までは、読者に対して「これから語られる象徴やイメージに惑わされるのではなく、その源泉である神とイエス・キリストを信頼し、今の生活の中でこの言葉を『守り』なさい」と力強く宣言している。神の言葉を「朗読し、聞き、守る」というプロセスを心に留

めておきたい。合わせて、キリスト者として、絶望的に見える状況下でも、歴史の手綱は神と小羊(イエス・キリスト)が握っている。この「視点の転換」を心に留めたい。

そして、それに基づいて、主イエス・キリストを証しする証人として生きることも心に留めたい。2 節に、ヨハネは「自分の見たことすべてを証した」とある。当時の「証し(マルテュリア、μαρτυρία)」は「殉教」と隣り合わせであった(英語の殉教者(martyr)の語源はこの「マルテュリア」である。

イエス・キリストを証言する、神の言葉に生きることは、単なる知識の蓄積ではなく、全人格的な「目撃」の表明である。